



写真1



写真2

写真1：ガ類の標本（清水一氏寄贈）。ドイツ箱（50.7cm × 41.8cm）と呼ばれる木製でガラス蓋の気密性の高い標本箱に、昆虫針を用いて標本を固定している。この箱には、コブガ類が収納されている。撮影のためガラス蓋は外してある。写真2：標本の収納の様子。標本を並べたドイツ箱が、専用の棚にぎっしり収納されている。

## 昆虫標本 40 万点—70 年にわたるコレクション—



大阪公立大学の昆虫標本室は、中百舌鳥キャンパスの農場管理棟1階にあり、農学研究科緑地環境科学専攻の環境動物昆虫学研究グループによって管理が行われている。標本数は昆虫類を中心に約40万点が所蔵されている。これらは、歴代の教員、学生が世界中から採集し、作成した標本が大部分を占めるが、アマチュア研究者や他の研究機関の研究者からの寄贈標本も含まれている。本研究グループの前身は1949年に開設された浪速大学農学部農業昆虫学講座で、大阪府立大学となってからは応用昆虫学講座、応用昆虫学研究室、昆虫学研究グループなど研究室名の変遷を経て大阪公立大学の現在に至っており、70年以上にわたって標本が収蔵されてきたことになる（写真2）。

歴代教員には、農業害虫を含むガ類のなかでも特に小型の「小蛾類」の分類を専門とする先生方が多かったことから、それらの標本が20万点近くと最も多く（写真1・3～5）、コウチュウ（甲虫）やハエの仲間がそれに続いている。現在でも小蛾類を中心に本研究室の関係者が新種記載の論文やそれらを網羅した図鑑等を発信している。

また、国内外の分類学者から問い合わせがあり、標本の閲覧、貸し出しなどを通じて、新種、新記録種の発見につながる例も多く、生物多様性の解明にも貢献している。これまでに新種として発表された際の模式標本（タイプ標本）の数は600個体以上にも及んでいる（写真3・4、図1）。卒業研究、修士・博士研究で収集された標本には、その時代、その地域のインベントリー（目録）としての価値があり、見つけ採り調査のほか、ライトトラップ（灯火採集）やピットフォールトラップ（落とし穴によるわな）などで採集されたものも多い。これらの標本の中には現在では絶滅危惧種や絶滅種となっている種のものも含まれることがある。たとえば、1958年に堺市黒山村（現在の美原区）で村田満氏の卒業研究の一環で採集された標本の中には、現在日本では全域から絶滅したスジゲンゴロウを含む貴重な種が多数含まれていた（写真6）。

昆虫は現在までに見つかったものだけでも地球上に約100万種がいると言われるが、進化の系統に従って約30のグループ（目：もく）に分けられている。たとえば、分かりやすい名前で言うと、トンボ目、カマキリ目、チョウ目、ハチ目…などである。昆虫学の基礎としては、こ



大阪公立大学・高専基金へのご寄附のお願い

お申込み時に「特定プロジェクトのために：⑨-3、⑨-7」を選択してください。（⑨-3：1号館ミュージアム構想のために ⑨-7：大阪府立大学創基140年事業のために）

【お問い合わせ】 渉外企画課 TEL: 06-6605-3415  
<https://www.omu.ac.jp/fund/>

編集発行  
大阪公立大学 大学史資料室  
協創研究センター・大学史編纂研究所  
杉本キャンパス学術情報総合センター6階（大学史資料室）  
Tel : 06-6605-3371 E-mail : gr-gakj-archives@omu.ac.jp

写真3

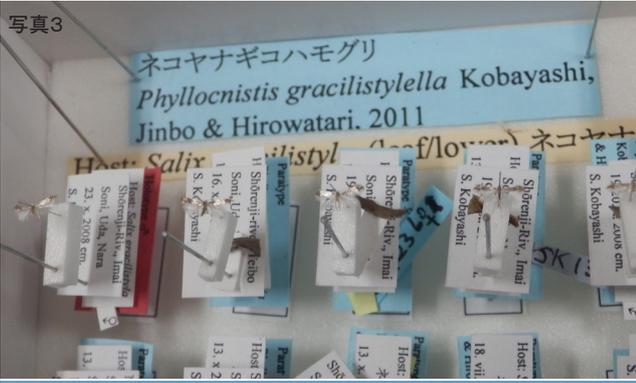


写真4



図1

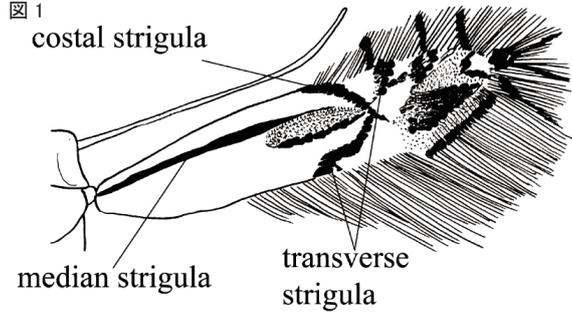


写真3：ネコヤナギコハモグリ（学名：*Phyllocnistis gracilistylella* Kobayashi, Jinbo & Hirowatari, 2011）。2011年に小林茂樹他の英語論文によって新種として発表された模式標本。赤いラベルがホロタイプ（正模式標本）、青いラベルがパラタイプ（副模式標本）である。写真4：写真3のホロタイプの拡大。翅の幅5.8 mm。中央に黄色帯がある。幼虫はヤナギの葉に潜る。写真5：ハマキソガ類の標本。微小なガは、微針に刺してポリフォーム台に固定して保存している。ポリフォーム台の下には厚紙の標本ラベルがあり、産地、採集年月日、採集者名などが記されている。このガは、翅に金色の模様があり美しい。写真6：1958年に堺市で見つかったスジゲンゴロウ（体長14 mm）とそのラベル。このゲンゴロウは現在の日本列島からは絶滅しており、1958年には堺市に生存していたことを示す重要な標本である。ラベルには、採集年月日である1958年8月25日とL・T（ライトトラップで採れたことを意味する）が記されている。写真7：甲虫類等の教育用標本箱。カブトムシ、クワガタ、タマムシ、カナブン、カミキリ、セミなどが並べられている。大型の昆虫で、人気がある。図1：ネコヤナギコハモグリ翅のスケッチ。昆虫の新種記載には、このようなスケッチを描いて、昆虫の特徴を示している。（写真3・4、図1は小林茂樹博士提供）

の30のグループを理解することが重要であるが、標本室には多くの目にわたる標本が収蔵されており、系統順に並べた教育用の標本箱のシリーズがある。これらの教育用標本箱は、昆虫学をはじめとする複数の授業で使用されているほか、大学祭や一般向けのイベントなどでも展示が行われている。標本のイベントでの需要は多く、大学祭、オープンキャンパス、幼稚園や小学校の見学、地域の観察会、出張講義など、年間を通して利用されて



写真5

写真6



25-VII-1958 L.T



写真7

いる。その際には、美しいチョウ類や外国のカブトムシ、クワガタムシなどの人気が高く（写真7）、一般の方々に昆虫学や生物多様性に関心を持っていただく入り口として、重要な役割を果たしている。

このように、大阪公立大学の標本は本来の目的である学術研究のみならず、社会貢献のツールとしての役割も担っており、今後もさまざまな場面で利用、活用が広がることが期待される。（農学研究科 平井規央）



### 資料室だより

◆大学史資料室では「大阪公立大学 大学史資料室 NEWS LETTER」を発行しています。大阪公立大学の貴重な学術資料や大学の歴史を紹介します。◆この「NEWS LETTER」は、大阪市立大学「140周年展+大学史資料館（大学博物館）設立準備 NEWS LETTER」の後継紙であり、「大学の知を発掘！」の番号を引き継いでいます。両紙とも大阪公立大学 大学史資料室のホームページ、図書館ホームページの機関リポジトリで公開しています。

### 大学史資料室からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→杉本キャンパス学術情報総合センター6階 大学史資料室  
Tel：06-6605-3371